

〈大谷石蔵新たな活用例〉

- ・飲食・物販・美容・複合店舗・宿泊・音楽ホール
- ・Cafe SAVOIA:カフェサボイア(宇都宮市今泉) ②
- ・Cafe del Olive:カフェド・オリーブ(宇都宮中央本町)
- ・Dining蔵 おしゃらく(宇都宮市宮園町)
- ・HACHINOJO food・wine(宇都宮市築瀬町)
- ・Jazz Cafe NOIR:ジャズカフェノール(宇都宮市東戸祭り) ③
- ・ビストロランテ ボヌール(宇都宮市戸祭り元町)
- ・石の蔵(宇都宮市東埜田)
- ・キジハジメテナク(宇都宮市大谷町) ④
- ・ビーグル養蜂園(宇都宮市長岡町) ⑤
- ・大和屋宇都宮店(宇都宮市日の出)
- ・ビューティサロンEL(宇都宮市上戸祭り) ⑥
- ・ヘリテージアイルッシュサロン(宇都宮市戸祭り元町)
- ・YOSHIDA MURA Village:吉田村ヴィレッジ(下野市本吉田) ⑦
- ・大谷コネクト(宇都宮市大谷町) ⑧
- ・高根沢ちよっ蔵ホール(高根沢町宝積寺)
- ・シカノクラ(鹿沼市睦町) ⑨



大谷コネクト 宇都宮店 ③



ビューティサロンEL 宇都宮店 ④



大谷コネクト 宇都宮店 ⑤



ビューティサロンEL 宇都宮店 ⑥



大谷コネクト 宇都宮店 ⑦



大谷コネクト 宇都宮店 ⑧



大谷コネクト 宇都宮店 ⑨

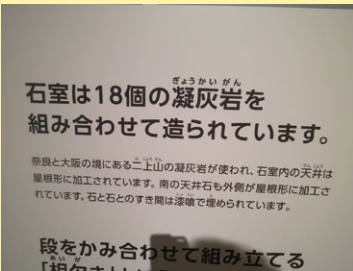
● 大谷石 東西南北 ●

大谷石を連想させた飛鳥の石室

NPO法人 大谷石研究会 広報担当 平沼 隆志

「あれ、大谷石かな?」思わず足を止めた。奈良県明日香村のキトラ古墳関連施設で見た同古墳の石室（模型）。表面のでこぼこ感、そして所々にある“ホクロ”が大谷石を連想させた。万葉の里で偶然にも大谷石の仲間に出会った。

約千三百年前の飛鳥時代に造られたとされる明日香村のキトラ古墳と高松塚古墳。どちらの石室も大谷石と同じ凝灰岩でできている。この凝灰岩は近郊の二上山で産出され、黒い大粒の角礫が混ざっているのが特徴だ。日本の古代国家は政治的・宗教的な施設の造営にこの凝灰岩をよく利用したという。凝灰岩は古代から日本人に身近な存在だった。



2026 栃木県立博物館連続講演会

(直接会場でお待ちしております)

【第1回】 7月25日(土)13時30分～
「大谷石の軌跡―石のまちの地質学的なエコロジー―」
東京科学大学環境・社会理工学院建築学系教授 安森亮雄

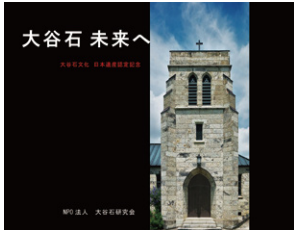
【第2回】 8月22日(土)13時30分～
「石のまち」大谷・昭和の石山物語
栃木県立博物館 学芸部人文課 佐藤光弘

【第3回】 9月12日(土)13時30分～
屏風岩石材石蔵の構成と意匠に関する研究
小山工業高等専門学校 建築学科 助教 小林基澄

写真集「大谷石 未来へ」

NPO法人 大谷石研究会
2,500円(税込) 113頁

本の希望者は HP から
またはメールで
お問い合わせください
info@ooyaishi.org

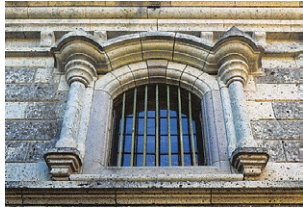


大谷石 未来へ

調査で明らかになったこと



小山高専調査のメンバー



西蔵のアーチ状窓 両側に円柱状の付け柱

今回の調査を通じて明らかにしたのは、この2棟の石蔵が単に洋風と和風という意匠的な違いにとどまらず、用途や空間構成、開口部のあり方など、多くの点で対照的な関係にあるということです。

西蔵は居住性を意識して開口部が多く設けられているのに対し、東蔵は倉庫としての機能を優先し、開口部を抑えた構成となっています。このような違いは、それぞれの用途に応じた合理的な設計の結果であると考えられます。

さらに、周辺に現存する他の大谷石建造物との比較から、屏風岩石材の石蔵は規模や意匠の点で際立った存在であることも確認されました。装飾的要素が豊富に用いられていることから、これらの石蔵は単なる保管施設にとどまらず、自社の技術力

や石材の価値を示す役割、いわば「見える建築」としての側面を持つている可能性も考えられます。市内に現存する他の石蔵と比較すると、多くは屏風岩石材石蔵より後期の昭和期に建てられ、積石造による2階建てである点は共通していますが、細部には違いが見られます。

例えば、一般的な石蔵では扉は石製で、屋根は切妻が主流であり、寄棟屋根の例はほとんど確認されません。意匠面ではオーダー柱が見られるものの、キーストーンやコーナーストーンまで備えたものは少数にとどまります。また、開口部に着目すると、数・規模ともに抑えられているものが多く、家財や商品、農作物などを保管する機能に特化した構成となっています。

さらに、明治期における石蔵建築は、木造の蔵の外壁に石を薄く張る「張石構法」が一般的であり、石をふんだんに用いた積石造の建物はむしろ少数でした。こうした周辺事例と比較すると、屏風岩石材の石蔵は規模が大きく、装飾性にも富んでおり、当時としては特異な存在であったことがわかります。そこには、石材を贅沢に用いる施工技術の高さとも

今回の実測調査は、学生にとっても貴重な学びの機会となりました。図面や文献だけでは得られない実寸の感覚や、現地での観察を通じた発見は、建築を学ぶうえで重要な経験となります。また、地域に根ざした歴史的建築に直接触れることで、文化財の保存や活用について考える契機ともなりました。

今後は、今回行えなかった石蔵内部や敷地周辺部の実測、図面作成を行い、得られた図面やデータをもとにさらなる分析を進めて、大谷石文化の全体像の把握につなげていきたいと考えています。またその結果を県の博物館でも発表し、より多くの人に大谷の石文化を共有する予定です。今回の調査と発表が、地域資源としての大谷石建築の価値を再認識する一助となれば幸いです。

に、意匠的な工夫が随所に見られます。以上の点を踏まえると、屏風岩石材の石蔵は単なる保管施設にとどまらず、立地条件や外観意匠を通じて自社の技術力や石材の価値を示す、いわばプロモーション的な役割も担っていたと考えられます。

また、敷地全体の配置にも注目すべき点が見られました。屏風岩石材の敷地は大谷街道に面しており、かつてはその前面に石材運搬のための軌道が敷設されていた。敷地内には広場や複数の石造建築が配置され、採石・加工・保管・輸送といった一連の作業が効率的に行える構成となっています。こうした配置は、石材会社としての機能性を強く反映したものであり、当時の産業構造を理解するうえでも重要な手がかりとなります。



今年の「孝子桜」(宇都宮市立城山西小学校)

「孝子桜(こうしざくら)」

むかしむかし、古賀志山のふもとに、お父を看病しながら、畑や山仕事をしていた孝助という息子がいたと。寝たきりのお父が、桜が見たいというので、木の下に来ては、「おねがいだ。一日でもいいから、桜の花を咲かせてください。」と、寒い冬の日ののに、毎日折り続けていたと。ある晩のことお父は、「すまん孝助、最後の願いだ。明日、桜の下に連れてってくれ。」と頼んだと。孝助は、月明かりを頼りに古賀志の大日如来様の祠に走り、折り続けたと。その日、孝助がお父を背負って、林を抜けると、満開の桜が目の前にあったと。

「お父つあん、咲いたぞ。桜がさいたぞ。」お父の目からは、涙がこぼれていたと。お父をゆっくりと下ろすと、二人で桜にむかって両手を合わせた。お父は、そのまま眠るように息を引きとったと。そのしだれ桜は「孝子桜」と呼ばれ、毎年美しい花を咲かせているそうだ。

宇都宮市立城山西小学校は、大谷の中心部から少し西、宇都宮市の最高峰「古賀志山」のふもとにたたずむ小さな小学校です。市の特認校として「会話科」が設置され、コミュニケーション能力の育成が行われています。その中に、英語で「大谷を紹介しよう」というコーナーがあり、大谷石文化を皆で学びあい伝えあつてふるさとの理解を深めています。

会話科のもう一つの主要な活動は「民話語り」(5年生)です。地元には伝わる民話「孝子桜」を利用して語りの練習を積み重ねる中で「コミュニケーション能力を育み豊かな表現力を学んでいきます。生き生きと練習に取り組む児童たちの真剣な姿が目につかふよです。

4月初旬に桜の開花に合わせて「孝子桜まつり」があるのですが、その中で子どもたちの演じる民話「孝子桜」が披露されます。お話の内容も皆の心を動かすものですが、さらに子どもたちが演じるひたむきな姿にも、ただ感動するしかありません。またさらにひらひらと舞い散る桜の花びらも、その感動をひきたせます。今年も大成功！

多忙な中、ふるさとの学習を大切にしてくださる先生方に感謝いたします。児童たちには、そんな先生方の背中を見て、さらに優しくさらに強く成長し、素晴らしい未来を創り出してほしいと思います。小学校の取材に真摯に対応していただいた松島先生、ご協力ありがとうございました。

会員通信

すばーそ!大谷

「孝子桜(こうしざくら)」

宇都宮市立城山西小学校の巻

NPO法人大谷石研究会 理事・広報担当 佐藤 光弘

(栃木県立博物館)